

水口祭

水口祭は、甲賀郡水口町水口に鎮座する水口神社を中心として、毎年四月十九、二十日の両日にわたって行われる郡内唯一の曳山祭です。

ここでは、多くの観光客で賑う水口祭の歴史と現状について紹介したいと思います。

宿場と城下の町水口

水口祭の歴史は、水口の町の盛衰と共にあったといえます。そこでまず、この地の歩みを振り返っておきましょう。

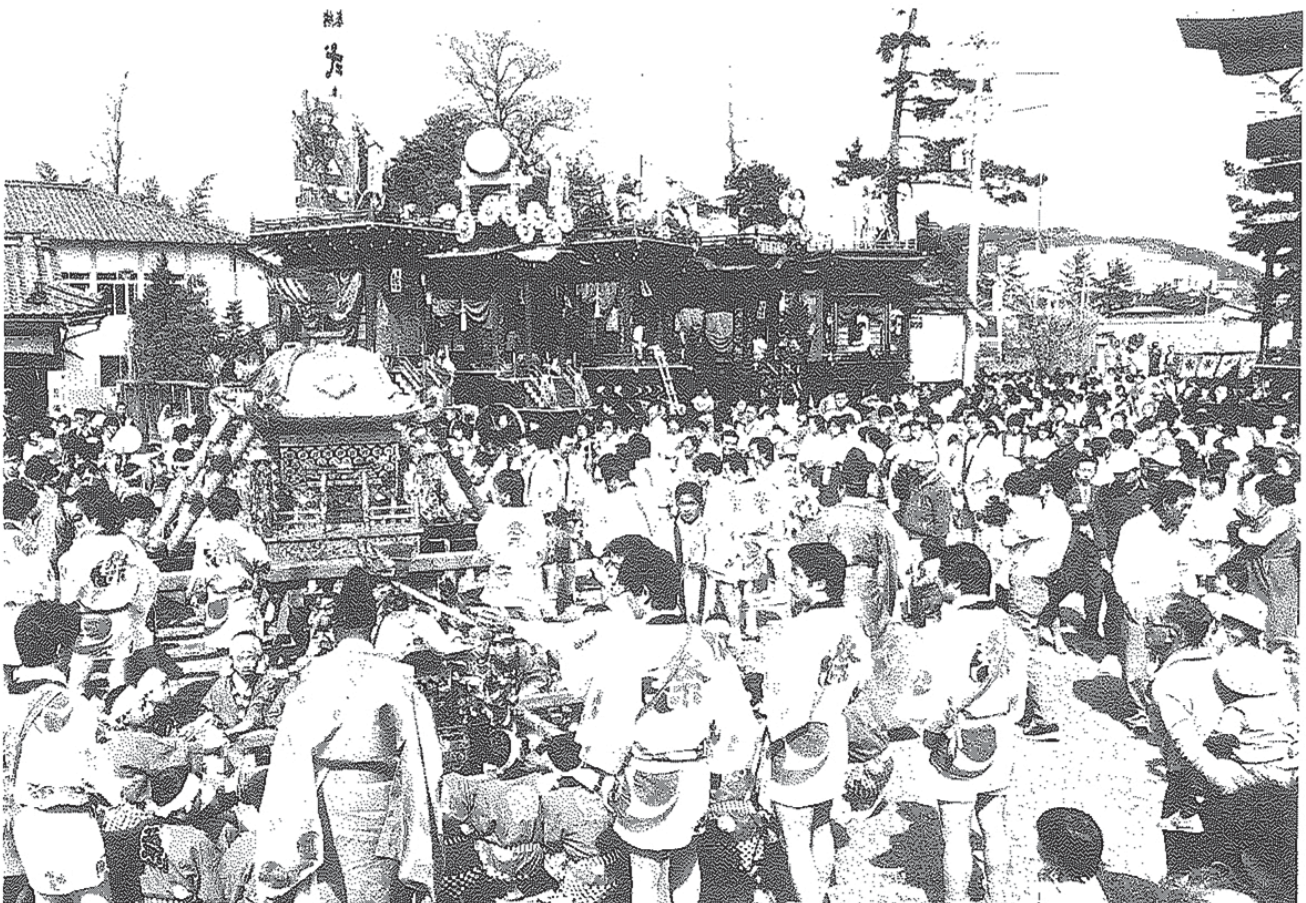
現在につながる町並の基礎が整えられたのは、近世の初めのことです。天正十三年(1585)天下統一を果たした豊臣秀吉が、この地を軍事

的要衝と考え、町の背後にある大岡山に城を築かせたことから、その山麓の水口は甲賀一郡の中心として、脚光をあびるようになりました。

この岡山城の城下町としての期間は、わずかに三代十五年に過ぎませんでした。豊臣氏に代った徳川氏も、この地を重視して直轄地とし、小堀遠州ら有力な代官を置きました。

また東海道の整備により、水口はその宿駅に指定され、宿場町として新たな出発を果しています。

これに加え、後年水口城を居城として加藤氏が入封し、水口藩二万石（後に二万五千石



(寿福 滋氏 撮影)

となる)のお膝元として、政治・経済・文化の中心を成すに至りました。

これらのことは、いずれも町の発展、ひいては祭礼の発展につながり、曳山の発生にも大きな影響を与えたと思われます。

町と町衆

宿場町となった市街は、東海道の往還を中心として東西に長く伸び、旅籠町や米屋町といった町名を持つ二十余りの「町」が、道路をはさんだ両側町として、区画整備されました。

町並みには本陣や宿問屋、旅籠や商店が軒をつらね、「道中一番の人とめ所」(「東海道名所記」という賑いを見せました。

さて、この地に住む人々は、その居住地によってそれぞれの「町」に属しました。中でも家持ちは「町衆」と呼ばれ、町の成員として発言権を持つと共に、町の維持に責任を持ち、町掟を定めてその暮しを律しました。

つまり水口と一口にいても、日々の生活はそれぞれの町、あるいは三か町程が集った町組を中心に行われ、これが祭に参加する単位となっていました。このことは、大きな変化もなく、今日に継承されています。

水口祭と水口神社

水口祭の行われる式内水口神社は、市街地の南に鎮座し、「大宮さん」と呼ばれ親しまれています。水口祭はこの大宮四月神事として古くから行われてきたもので、「水口祭」と呼ばれるようになったのは近代のことです。

江戸時代は、旧暦四月の一の申日、あるいは二の申日に行われていましたが、明治二十九年より、現行の新暦四月二十日に固定されました。

江戸時代の神事は、世襲の社家を中心として、他に町内の天台宗寺院も加わり、また氏子組織として宮座の奉仕が見られるなど複雑でしたが、明治以降は祭式の近代化が進められました。

曳山の歴史

水口神社四月の神事としての歴史は、おそらく近世以前に溯るものと思われますが、記録が失われその詳細を知ることはできません。しかし、曳山祭としての歩みは、史料が良く残されており、その発生から現在に至る経緯を知ることができます。

県下の曳山祭の多くが、その発生年代を確定できていない事を考えれば、珍しく貴重なことといえましよう。

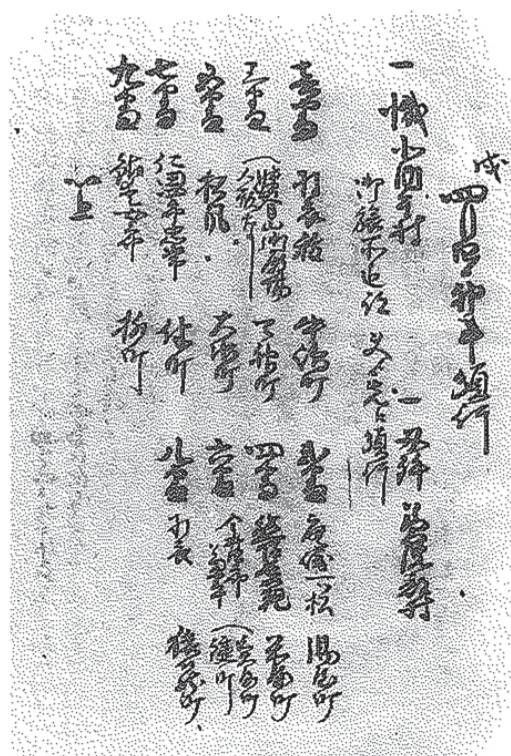
残された史料によれば、曳山発生は突如としてなされたのではなく、これに至る前史のあったことが知られるのです。

まず、江戸時代の寛文年間、水口神社の雨乞いに際して、ねり物や能が奉納されています。

その後も雨乞いには、毎年各種の踊りや仮装行列が行われています。

また、宝永年間には、四月の神事に各町から趣向を凝らしたねり物・歌舞音曲が参加し、遠方からの見物人で大いに賑っています。

そして、享保年間になると、雨乞いに「山鉦」の巡行したことが記録に出てきます。しかしながら、伝統を重んじる四月の神事に新規のだしものをする事は、容易には認めら



文政九年の曳山巡行 (大庄屋山村家日記より)

れなかったようです。

当時国内は飢饉が打ち続き、宿駅の困窮も重大でした。町衆としては、この状況を打ちはらうべく、水口神社への願を立てていますが、その願文の中で、願が叶えば祭礼に曳山を巡行させたいと述べています。

その後巡行への努力が続けられ、享保十八年(1733)には巡行の条件が整いましたが、飢饉のため翌十九年も見合わせられ、享保二十年(1735)四月四日、晴れて九基の曳山が町内を巡行しました。この時は城内にもくりこんで、家中に披露されています。

その後の祭礼は、神事と曳山巡行の姿も整えられ、曳山の数も徐々に増えて、最盛期には三十基余りになったといわれています。

明治になってからは、宿場の衰微と共に曳山の数も減り、明治末年には、電灯線の架設によって多くが巡行不可能となり、現在の十六基となりました。しかし戦後は、郷土の誇る祭礼として、その賑やかさを取り戻しました。

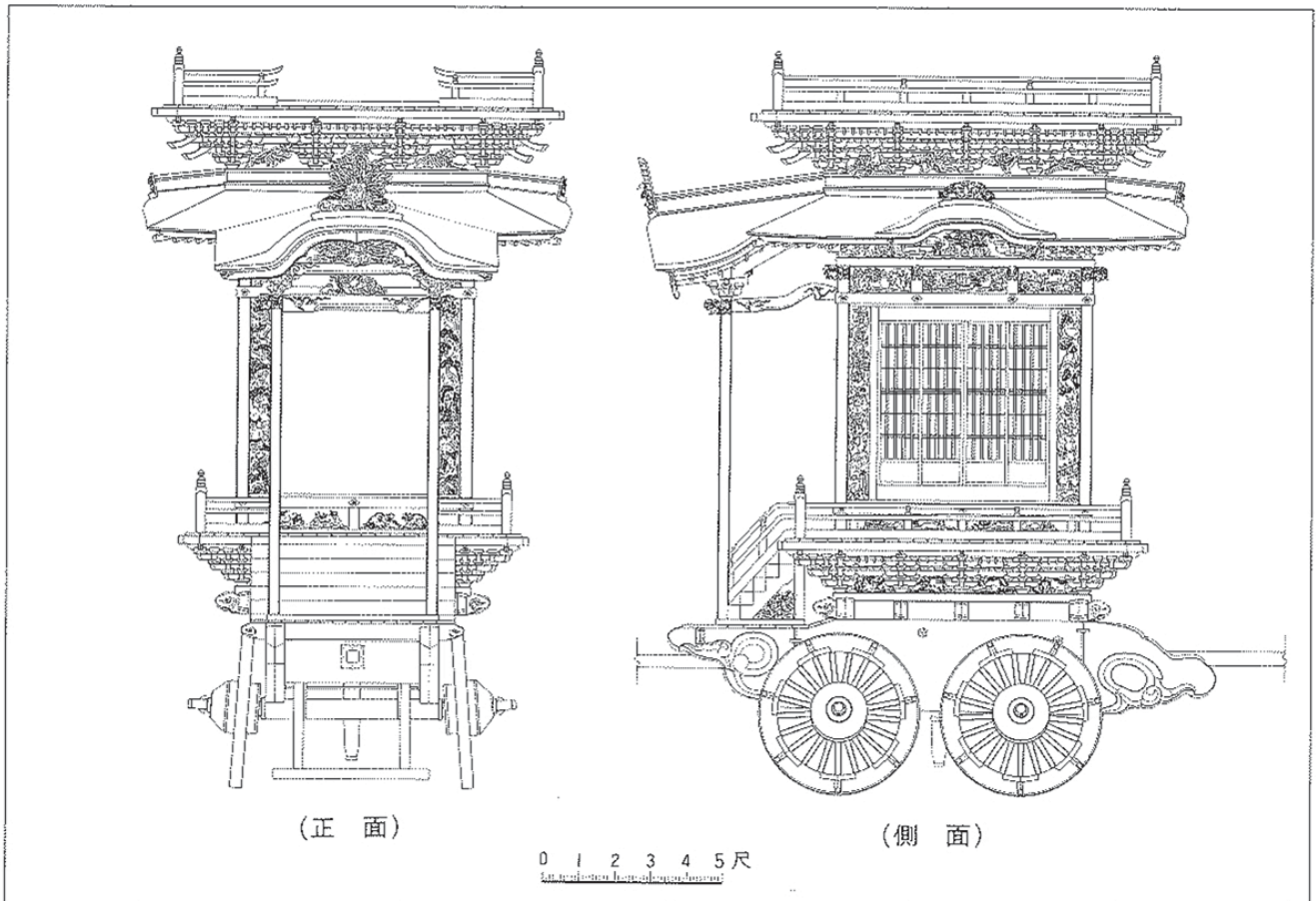
曳山のかたち

現在水口祭に巡行する曳山の大半は、江戸時代の末に、地元の大工によって建造されたものです。

四輪の御所車を持つ車台部、囃子方の乗る屋台部、人形を乗せる屋根のない露天部から成り、祭の時に組み立てや分解を行わない構造をしているため、町内にこれを格納する山蔵が建てられています。

十六基の曳山は、それぞれ少しずつ意匠が異なりますが、^{ひし}庇や^{こうはい}向拝、^{みざし}檣などを持たない簡素な形のことを「^{じゅうばこやま}重箱山」と呼び、水口の曳山の基本的な形であるといわれています。

曳山の巡行は、主に二本の曳綱と前後のテコによって操作しますが、路上での方向転換は、「ギリマワシ」といわれる方法を用います。これは車台下部に突出した芯棒によって曳山全体を支え、車輪を浮かせて回転させるもので、熟練を要し緊張するところですが、巡行中の見せ場にもなっています。



水口祭の曳山（東町）

（菅原 和之氏 原図）

水口祭の曳山と同系統の構造と操作方法を伝えるものとしては、日野祭の曳山をはじめとして、湖東を中心に五十余基（三重県内も含む）が現存し、相互の関係が注目されます。

曳山の装飾とダシ

水口祭の曳山は白木造りが多いため、一見すると簡素に見えます。しかし複雑な組み物や、その間を埋める彫刻、幕などに見るべきものがあります。

見送りなどの幕は、数は少ないながら、旅籠町の見送りのように優秀な出来で、しかも京都からの購入の経緯を記す史料を残しているものや、天神町の内幕のように、李氏朝鮮末期の段通を仕立て直した珍しいものもあります。

これらの装飾品と共に、曳山の上に飾りつけられる人形も、巡行見物の眼を楽しませてくれます。

この人形を地元では「ダシ」と呼び、巡行のたびに題材を変え、その出来栄を競って

います。

ダシの題材は、歌舞伎や歴史物語にちなんだものが好まれており、太平記や太閤記などは、その中でもよく採用されています。

一例として弘化元年（1844）のダシの外題を掲げておきます。

町名	ダシの外題
鍵町・魚屋町	羽衣
伴町	松茸山
湯屋町	曾我五郎夜討
柳町	鮎釣女郎
松原町	鏡山七ツ目
大池町	羽衣
天神町	近江源氏九ツ目
市場町	早乙女
旅籠町	釣孤
呉服町	猿に御幣
葛籠町	新田義貞家来篠塚伊賀守
小坂町	福引富之図
河内町	紅葉狩
夷町	廿四孝三段目

水口には江戸時代に芝居小屋もありましたし、庶民の教養娯楽が、ダシにも反映しているといえましょう。なお、ダシの芯になるのは木や藁ですが、頭や手足は古くからのものが伝えられています。

水口囃子

曳山の巡行と共に奏でられるお囃子は、水口囃子として知られており、祭を盛り上げる最高の演出といえましょう。

曳山に乗りこんだ囃子方は、腕に自信の若衆達、横笛を筆頭として、大太鼓、小太鼓、鉦から構成されています。

曲目は、神前奉納の曲として、ガク、オロチの二曲があり、また巡行の曲として、バカバヤシ、オオマ、シチョウメ、ヤタイが伝承されています。以前は竜笛や鼓を用いるカグラという曲もありましたが、今ではすたれてしまいました。

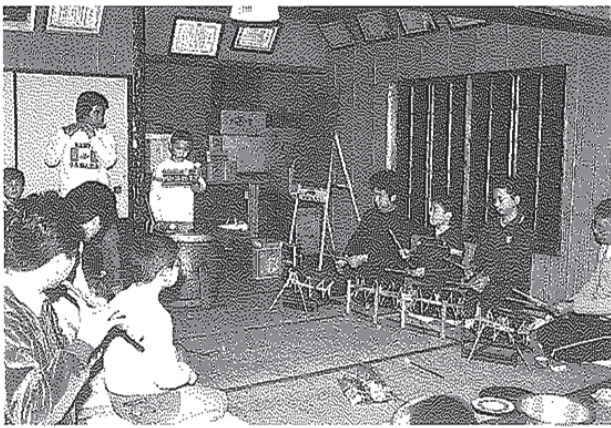
水口囃子は、江戸時代参勤中の水口藩士が江戸の神田囃子を覚え、水口にこれを伝えた



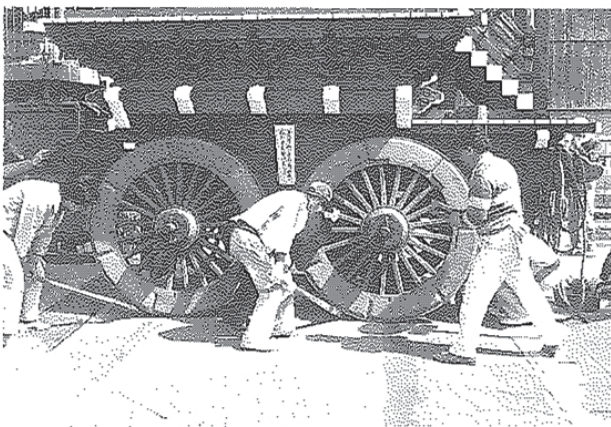
見送りをつけて巡行する曳山



クジトリ



囃子の稽古



地渡りで車輪の点検



宵宮・曳山ダシの宵宮飾り

とされています。同じく関東からの伝承を伝える日野祭の囃子とは、曲名や曲調に共通性があり、曳山の形態が共通することとあわせて、興味のもたれるところです。

囃子方として曳山に乗る者は、古くは町衆の長男に限られていましたが、今では後継者難から、町内の男子は全て、小学校の低学年の頃から稽古をつけてもらうようになっています。

現在の曳山祭とその見所

水口祭は、旧市街地の四十九か町が参加する大規模な祭礼です。また江戸時代から、多くの見物人で賑ったように、自分達が楽しむばかりでなく、人の眼を強く意識した祭礼です。それだけに準備も大変で、神社はもとより各町内でも年の明けると同時にその心づもりをしなければなりません。

正月、曳山を持つ町内では、初寄りの席において、その年の出番非番を決定します。十六基の曳山の内、出番は六基程度になります。出番か否かによって、町内の心持ちもずいぶん違います。出番となれば、町代が責任者となり、若衆を中心として準備が進められます。

三月中旬になると、囃子方の稽古が連夜行われるようになります。これと並行してダシ作りが進められます。夜の町並みに響く囃子の音色に、人々は近づく祭と本格的な春の到来を感じるのです。

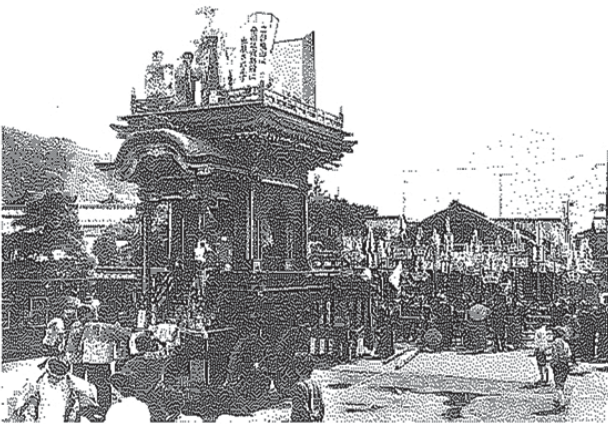
四月にはいと、すぐにクジトリが神前で行われます。クジは曳山のクジと、^{おひがし}纏田楽（曳山の無い町と曳山非番町から奉納する）のクジがあり、渡行の順序が決められます。なお水口祭には、クジとらずの制はありません。

巡行の十日程前になると、「地渡り」と呼ぶ試運転が行われます。この日午前中は山蔵の清掃と備品の点検を行い、午後は町の周囲を一巡して、車輪や芯棒に異状の無いことを確かめます。囃子方も乗り込んで、祭気分が高まります。

四月十九日は宵宮祭です。曳山のある町内



山蔵より出発する曳山



弟殿に集まった曳山と田楽



松並木を往く纏田楽



神輿渡御

は、出番非番によらず山蔵の扉をあけ、提灯を飾りつけます。また出番の曳山に御幣や番付をとりつけます。

この日は遅くまで宵宮囃子が町に流れ、曳山やダシを見物する人で賑います。

明けて四月二十日は本祭です。曳山や纏田楽は、朝各町内を出発し、まず「弟殿」と呼ばれる御旅所に集まります。

弟殿では曳山にダシの飾りつけが行われ、昼前にはクジの順番に従い、松並木の参道を神社へと進みます。桜の散る中を進む巡行風景は一番の見所となっています。

さて、境内に曳山や纏田楽が揃うと、神事や神輿の渡御があります。神輿は市街地をくまなく廻りますから、その間曳山は、境内で囃子を行い、参詣見物の人々を楽しませます。

夕刻神輿が境内に戻ってくると、曳山はダシをおろし、提灯に灯をともして順々に町内へと帰ります。これを「帰り山」といいます。曳山が山蔵に納められるのは、夜も十時を過ぎています。

翌二十一日は「後宴」といい、神社では神輿が納められ、御湯が献じられて祭礼を終了します。各町内においても、曳山の清掃を済ませた後、慰労の宴を設けて祭の疲れをいやします。

むすび

今日、曳山祭を維持継承していくことは、経済的にも技術的にも容易なことではありません。水口祭においても、町衆の伝統を守るため、努力してその保存と振興につとめています。

なお、昭和五十九年からは、水口神社に隣接した町立歴史民俗資料館に曳山が収納展示され、その姿を常時見ることができるようになりました。

水口曳山祭＝滋賀県指定無形民俗文化財

曳山十六基＝水口町指定有形民俗文化財

(米田 実氏 提供)